鬼北町立広見中学校
道徳通信
ＮＯ．39
令和８年１月８日発行

よりよく生きる

新年スタート！！

新年がスタートしました。生徒の皆さん、保護者の皆様、明けましておめでとうございます。今年も１年間、よろしくお願いいたします。

今年も、生徒の皆さんが大きな成長を遂げていくことができるよう、道徳の授業やその他の教育活動を充実させていきたいと考えています。道徳通信も、引き続き発行していく予定です。学びの多い１年間になるよう、生徒の皆さんはいろいろなことに考えを巡らせ、そして全ての活動に一生懸命取り組んでいってください。生徒の皆さんの、今年１年間の活躍を期待しています！！！

今回は、正月にまつわる昔話を紹介したいと思います。道徳的な生き方にもつながる内容になっています。ぜひ、御覧ください。

火の正月

お正月を明日迎えるある日のこと、お金持ちのお家に旅のお坊さんがやってきました。そして、一晩泊めてくださいと頼みました。金持ちの主人は、大変けちでした。お坊さんの身なりを見て、汚い者に貸す部屋などない！と追い払いました。

お坊さんは、今度は隣のおんぼろ家に声を掛けました。そこには貧しいけれど、大変に心優しいおじいさんとおばあさんが住んでおりました。「貧乏で、初詣・年越しの食べ物はひとつもありません。温かい薪しかありませんが、どうぞ入ってください」いろりには赤々と火が燃えていました。お坊さんは、囲炉裏の前に腰掛けると、袋から何やら取り出して、お湯の沸き立つ鍋へ入れました。しばらくすると、鍋にはグツグツグツとおいしそうな雑炊が鍋いっぱいに煮えていたのです。その夜、お坊さんのおかげで、おじいさんたちは久しぶりによい年越しができました。次の朝、お坊さんは出発の準備をしながら、御礼に何か欲しい物はないかと尋ねました。二人は、何もいりません。できるなら、若返りたいですねと答えました。それなら、井戸の水を元日の朝に汲み水を沸かして浴びてみなさいと言い、去っていきました。二人がお坊さんに言われた通り、元旦に若水を汲み沸かして浴びると、不思議なことに十七、八才の若者に若返ったのです。そして若返った心の優しいおじいさんとおばあさんは、ずっと幸せに暮らしたということです。

このお話は、豪華な食べ物や正月飾りなどなくても、暖かい“火”さえあれば、新年・初詣は毎年迎えられるというお話です。人の心の暖かさの象徴でもある“火”を正月に再確認して、穏やかな一年を過ごそうという昔ながらの言い伝えです。物が溢れる現代において、人や神仏への感謝の念が忘れられることも多いです。新年の初詣には、このお話を思い出してお参りしてみてください。